



待降節第 2 主日 (マルコ 1:1-8)

主の道を整える生き方を現代に

待降節第 2 主日は、洗礼者ヨハネが登場する場面が福音朗読に選ばれます。「主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ」という叫びに、わたしたちはどのように応じたらよいのかを今週考えることにしましょう。わたしたちが相応しく洗礼者ヨハネの叫びに答えるなら、現代に洗礼者ヨハネの叫び声を生きたものにする事ができます。

ここ数週間で、記憶に残る興味深い人と出会いました。先月お会いしたのは一組の若いカップルで、先祖に中田藤吉・中田藤太郎神父さまを持っている人でした。わたしも中田姓ですから当然この 2 人の中田神父さまは先祖がつながっていきまして、初めてお会いした若い青年なのに、先祖の話で話し込んですっかり打ち解けてしまいました。現在平戸で病院勤務ということなので、将来また会うこともあるでしょう。

もう一人は、曾根の巡回地から来た人でした。この方も全く知らない人ですが、親同士が兄弟で福見に住んでいる人を訪ねてみたがその時は会えず、せっかく福見教会の近くに來たから主任神父さまに挨拶してから帰ろうと浜串の司祭館を訪ねてくれたのでした。

その人は話をしているうちに声が詰まり、福見に訪ねて行った人のことを、もっと早くから親しくしておくべきだった、このまま疎遠になりはしないかと心を痛めている様子でした。訪ねに行くまでにこんなに時間がかかってしまったと、初対面のわたしの前でさめざめと泣くのでした。わたしは昼ごはんの真っ最中だったので、涙ながらに話すその人の話をおかずにご飯を食べたのでした。

この二通りの出会い、何がわたしの心に響いたかという点と、信仰にまっすぐ生きているという点です。先祖をたどって五島までやって来て、共通の先祖がいるわたしに信仰に生きた先祖の話を目を輝かせてしている。福見のおじさんが生きている時に世話になって、今おじさんに恩返しができない分、何十年も会っていないとこの人に会って、おじさんの分まで恩返しをしたいと涙ながらに話している。この人たちには一本筋が通っていると思ったのです。

筋が通っている人の話、信念を曲げずに貫いている人の話は心を打つものです。なぜでしょうか。その人の中に、まっすぐに通った道があるからです。カトリック信者にとってそれは主の道です。主が通られる道筋がその人の中にまっすぐにひかれています。こういう人の話はいつも人の心を打つのではないのでしょうか。

わたしは、最近出会ったこの二通りの人たちは、すでに洗礼者ヨハネの叫びに耳を傾け、その呼びかけに答えて生き始めている人々だと思いました。「主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。」(1・3) 主のために道を整え、自分の生き方に主を迎えることを最上の喜びとし、その他のことを横に置ける人々です。

今回出会った人々が、その生き方を貫いてくれたらと願っています。

先祖の信仰を目を輝かせて語る生き方。親の信仰を誇りに思い、いとこ
と思ひ出話を語り合いたいと涙ながらに切望する生き方。それで十分で
す。どちらも、語ろうと思えば自分の成し遂げたことを語れるでしょう。
それをあえて横に置いて、信仰にまつわる話を最優先に語る。こういう
人は、「主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ」この洗礼者ヨハネ
の叫びを現代によみがえらせている人だと思ふのです。

主をお迎えする道をまっすぐに通すため、他のものを横に置ける人
は誰でも、現代に洗礼者ヨハネの叫びをよみがえらせる人です。この生
き方は、現代に対する挑戦でもあります。現代は、「物質的繁栄」「経
済最優先」という道をまっすぐに通すために、他のものを横に置く生き
方が幅を利かせています。誰かの受け売りみたいですが、「この道しか
ない」と言っています。

では経済最優先で信仰を横に置いて、わたしたちは救い主を本当に
お迎えできるのでしょうか。信仰の話は、時として声を詰まらせるほど
の深みがありますが、経済の話で声を詰まらせることが果たしてあるで
しょうか。救い主をお迎えする準備をなさいと叫ぶ洗礼者ヨハネの声
を、荒れ野に閉じ込めてしまってよいのでしょうか。むしろ、経済最優先
と叫んでいる社会の中心で、「主の道を整え、その道筋をまっすぐにせ
よ」と響かせるべきではないのでしょうか。

わたしの生き方には、信仰のまっすぐな道がひかれていますか。経済最優先で、信仰の道は石だらけの歩きたくない道となっ
ているのでしょうか。救い主をお迎えし、救い主に確実にお会いするためには、
「主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ」という声に耳を傾ける必
要があります。

これからの約三週間、救い主を迎えようとしている人なのだと周り
の人にも感じさせる生き方を工夫しましょう。主を迎えることが何より
大事なのだと周りの人に感じさせることができれば、あなたもまた洗
礼者ヨハネの叫びを現代によみがえらせている人なのです。